

和三十七年または三十八年か？ 初の戦友会を開き、参加者も三十〜四十人と盛大でした。そして昔の同年兵の親しみと労苦を分かちあった共感とを夜通し悲喜交々極めつくしました。翌朝別れが辛くて次の再会を堅い握手に託して別れました。

五年前には病没と治療のため二十三人に減員しました。今年の六月、城崎温泉での会ではわずか五人に減りました。高齢化と病弱化のせいでしょう。私はお陰様で元気で楽しんでます。最後まで戦死者のご冥福とご遺族のご多幸を、併せて祖国日本の繁栄、世界平和へ寄与を念じ祈っております。

全国の恩欠連の戦友の諸兄よ！ 願わくば、「戦争体験の労苦を語り継いで、より逞しい日本を目指して、親、子、孫へと共に頑張りぬくことを誓いましょう」

私の戦中戦後

兵庫県 衣川 義高

私は大正八（一九一九）年一月十七日、兵庫県朝来郡東河村宮において父辰次、母静江の長男として生れました。

第三人、妹三人の七人兄弟でした。父母は農業を営んでおり、子供が多くて大変だったと思います。

私が小学校を出た昭和六（一九三一）年といえは満州事変が起きた年で、当時の農村は大不況で、私の村は戸数三四〇戸の小さな村でしたが負債はなんと六十万円で、当時の金額としては大金です。農村負債救済に関する全国協議会の決議文を携えて兵庫県代表として藤原村長が上京し、「犬飼首相ほか関係大臣に陳情し、政府貸付け自作農資金の無利子五カ年間償還延期を獲得す」と村誌に書き残されています。

当時の子供は学校を出ると、それぞれ職を求めて半

分あまりが出稼ぎに出て、残りの半分は高等科に進学。一、二年生は一つの教室で複式学級でした。農繁期になると「田植え休み」とか「蚕休み」といって農繁休暇がありました。小学校も五、六年生になると弟や妹をつれて、子守をしながらの学校でした。今日ではとても考えられません。子供もよく手伝っていました。その後、国でも満州開拓を勧める等、これが当時の私の少年時代です。

昭和十二年七月七日、支那事変が起き、これからは軍需産業の時代だと、同級生三人が職安を通じて大阪の住友金属を受験したら幸い三人共に合格し、昭和十二年の九月から旋盤工として兵器の生産に頑張ることとなりました。海軍に納める大砲の砲弾を作りました。十五センチと十四センチの撤甲弾・榴散弾などを作りました。

昭和十四年五月に十四年徴集兵として徴兵検査を受け、甲種合格となり、昭和十四年十二月十日、現役兵として鳥取歩兵第四十連隊第二中隊に入隊と決まりました。

した。当時は陸海軍共に多くの人に見送られ、元気よく衛門をくぐりました。

どこの連隊でも同じようなことをやっていたようで、入隊して十日間は、お客様扱いで何事も親切に教えられ、十日が過ぎ第一回の給金が支給されると「お前等は、これで一人前の二等兵だ。教練はこれからだが、内務班の事はすべて教えた。今まで教えられた事を良く守り切磋琢磨し共に助け合い、一人の落伍者もないように。一人でも間違えば皆の責任だ」と言われました。このことが後々の苦勞の種でした。

昭和十四年十二月二十日から翌十五年三月十六日まで、第一期の教育が完了するまで、初年兵は一人として「今日は殴られずにすんだ」という日はありませんでした。木銃が折れるぐらい殴り、重傷を負わせたために軍医が怒り、重謹慎の罰を受けた事件がありました。

同じ第四十連隊でも昭和二年兵は一度も殴ったり殴られたこともないとのことで、こんな時代もあったの

かと夢のような話もあります。

私は第二中隊の第一班で軽機班でした。同年兵は二十一人で、その競争が始まりました。他に二年兵、三年兵、皆現役兵ばかりでした。

軽機の手入れは皆の共同ですませ、その後自分の三八式小銃の手入れをします。軽機班は小銃班に比べ共同の分だけ多忙でした。競争の生活ですから少しの間でも大切でした。

鳥取連隊は日本一の健脚部隊と言われますが演習場が砂浜ということで、鳥取の砂は細かくて足がめり込んで歩くのが大変でした。特に上り坂では三步進んで二歩下がるということでした。こんなことを繰り返しているうちに脚が鍛えられ健脚部隊が生まれたのでしょう。砂が細かくて靴と足との間に入り、足が痛くて困ったことが度々ありました。その点、古年兵は巻脚絆と靴が密着しているため砂が入りませんでした。さすがだと感心しました。

寒かった鳥取の冬も、いつしか過ぎて、昭和十五年三月六日に第一期教育が完了し、四月一日付で上等兵

候補者を命ぜられ、猛訓練が始まり、また特業教育も始まりました。

私は入隊するまで住友金属で兵器の生産に従事していたので、特業は銃火兵と決まりました。兵器の修理が本職ということになりました。連隊で一番で通せば満期の時には「兵技下士官適任証」が付与されました。これは大変な業ですが頑張りました。

六月一日、陸軍一等兵を命ぜられ、星が二つになり、精勤賞ももらって兵隊らしくなりました。

昭和十五年八月一日、編成下令、これで外地に行くことになりました。八月二日、第二中隊編入。八月七日、編成完結、十四日、鳥取出発、十六日、宇品港出発、二十日、大連上陸、関東州通過、二十一日、錦州到着。同地警備三ヵ月半。十二月八日、移駐のため錦州出発、十二月十一日、東安省密山県平陽到着、同地付近の警備につくことになりました。平陽はソ満国境の町で、日本軍が陣地を作ったために出来た街でした。

警備について二日後の十二月二十三日、事件が起きました。夜間巡察中、ソ連兵二人が吹雪と暗夜のため道に迷い越境しているのを発見、逮捕しました。その後、ソ連軍も満人二人を拉致、連れ去ったのでした。

翌二十四日十一時、第二中隊に出動命令が発せられ、まずは腹ごしらえをと食事を取り、軍装を整え、実弾が支給され、自動車で山の麓まで運ばれました。

山道に入ると夜になったのですが幸い月夜で道は良く見えました。国境線は地続きになっており一触即発の危機だったのです。監視哨に到着したが物々しい雰囲気の中、小隊長が「撃つな！ 絶対撃ってはならん！」と必死に我々を鎮めたのです。私等もノモンハンの再来かと心配しましたが、ソ連極東軍と外交交渉によってソ連兵引き渡しが終わり、やれやれということでした。小隊長の制止がなければ大変でした。

私等の任務は国境監視と陣地警備が任務ですので、有事に備え一時の油断も許されませんでした。幸い一発の弾を撃つことも撃たれることもありませんでした。

た。

『昭和十六年一月一日、陸軍上等兵ヲ命ズ（軍隊手帖より）』。

国境陣地警備の冬の一日。朝の点呼が終ると全員山に薪木を取りに行きます。一本ずつ担いで帰ってきます。衛兵要員のほかの者は、それぞれ手分けして、朝運んできた薪用の木を短く切って割ります。

北満の冬は一滴の水もありません。まず水作りから始めます。陣地を造る時コンクリート用の水に使用した大きな池があり一面に凍っています。この水を割ってかます吠（わらで作った袋）に入れて持ち帰ります。

氷は釜に入れ、薪をくべて水作りです。明朝持ち帰る薪の準備に山に行き、一人で運べる長さに切って準備します。水作り用の薪のほかに暖房用にもたくさん用意せねばならず、零下三十度との戦いにも勝たねばなりません。

寒かった北満の地にも春がやってきて池の水が溶け始めますと大変です。氷は吠で運べましたが水は運べません。夏場は谷川からポンプで上げていましたが、

地中に埋設したパイプの氷は溶けず大変困りました。数少ないバケツを集めて、リレーでの水運びで、朝の洗面用から炊事用や風呂の水までとなると大変でした。

その頃、私は銃工兵として勤務しておりました。ある時、谷川からの揚水ポンプが故障して水が上がり、炊事にこと欠くので見てもらいたいと頼まれ点検すると、シリンダーのメタルが焼き付いて破損しているのです。交換品は本部の街まで行かねば有りません。いろいろ考えた末、射撃の演習場へ行って、銃弾を拾って鉛を溶かしてメタルを作り、見事故障を直し大いに感謝されたことがあります。

また、小銃の命中率が悪いので直せないかと小銃班長から頼まれ、照星を旋盤で調整してあげたら抜群の命中になったと大喜びされたり、小銃の床尾板が割れたものを木部全部交換したこともあります。「トラックの係が病気になる、エンジンが掛からず車を使えなくて困った。なんとかしてくれ」と頼まれて直してやったり、私なりに役に立てることは喜んでやってあ

げたので皆から感謝されました。

北満で春と夏が一度にやってきて、その時は野も山も一面に花、花です。スズラン、ユリ、杏の花は桜と思える程美しく咲いていました。近づいて見ると梅のようでした。またワラビがたくさん出ていて、とても美味しくたくさん食べて、一週間もするとニキビが出て困りました。

昭和十五年徴集兵から徴募区が大阪歩兵第三十七連隊となり鳥取四十連隊は私等で終わりになりました。昭和十六年四月一日に十五年徴集の初年兵が入隊してきました。私等十四年兵は一年四カ月ぶりで待望の二年兵になりました。ところが三カ月後の昭和十六年七月、関東軍特別大演習（関特演）で満州に大部隊が集まるようになり、中隊にも大阪第三十七連隊から既教育の一等兵、上等兵の召集兵が七十四人入ってきました。支那事变従軍兵もおりました。

大阪出身の初年兵は大喜び、同郷の召集兵は心強い限り。鳥取出身の二、三年兵にいじめられているとこ

ろです。ビンタの数も減りました。

大部隊の輸送で主食は運べても副食用品は運べないとのことで、八月から三カ月間は大根の千切りを、朝は味噌汁、夕食も千切り大根の味噌煮で、大阪の兵隊曰く「四十連隊は満州第九六〇部隊で、九六〇ブラス四〇で千ということで、名の通り千切部隊だ」と言っていました。皆が特に不自由したのがタバコでした。三カ月は配給がありませんでした。

関特演で兵舎は満員になりました。八錐形の天幕で過ごしましたが、そのうちにソ連側から丸見えの場所にバタバタとバラックを建て、冬が近づくと周囲にれんがを積み上げました。それから部隊の移動や行動は白昼堂々とソ連側から丸見えでも平気でやっていました。この先どうなるのか分かりません。

十二月に大東亜戦争が始まりましたが、関東軍は大部隊が集中しておりますので当時は心強かったです。私は最前線で国境守備隊ですので陣地増強や演習に励んでいました。十六、十七年兵の初年兵教育を二回受

け持ち、特業は銃工兵、兵器の修理でした。

昭和十八年三月二十六日、内地帰還のため駐屯地東安省雞寧県平陽を出発、朝鮮經由、釜山港三月三十日出発、同日下関着、歩兵第三十七連隊に転属、四月三日、陸軍兵長、四日、善行証書付与され、同日現役満期、同日兵技下士官適任證書付与。これが私の三年五カ月にわたる現役でした。

昭和十八年四月に大阪住友金属に満期除隊を報告。工場長は「長い間ご苦労でした。これからは召集延期願いを出してあるので、軍隊のことは心配せず兵器の生産に励んで下さい」ということで、その後赤紙は来ませんでした。

その後、住友で砲弾を作っているうちに、もう砲弾はいらなくなったから作らんでよいと上から指示がきました。あー海軍もあかんなと思いました。軍艦が無くなったんだと同僚と話しました。昭和十九年十二月になると空襲ばかりで仕事になりません。その頃は飛行機のシリンドラーの部品を作っていました。

不思議なことに米空軍はこの工場は何を作ってい

るか全部承知していたとしか思えぬ程、プロペラ等飛行機の重要な部品を作っている工場は、徹底的に空爆を繰り返していました。私の工場は、その点、あまり重要な部品ではないものだから空爆は免れました。

昭和二十年八月、終戦で会社を退職、故郷但馬に帰って参りました。次男（司令部付だった）は終戦の八日前ルソン島ヌエバビスカヤ州カシブで師団長が「司令解散、各自自由行動」を命じたため行方不明となり、終戦後探せども生存の見込みないことから戦死を認めて欲しいとの不可解な通知がありました。三男は中国で終戦、昭和二十一年四月に元気に帰ってきました。四男は生野銀山に報國隊で行っておりましたが、終戦で出稼ぎから帰ってきました。

戦争中は父母妹の三人家族でいたところへ終戦で、私と嫁、三男、四男、大阪で働いていた妹の計五人が帰って、合計八人の大家族になり、何はにおいても食料を作らねばと頑張りました。

田六反、畑四反の小さな自作農だった我が家は、農

地法の恩恵もほとんど無く、配給米もほとんど無く、代用に砂糖が配給される仕末でした。肥料も不足で作物が凶でも供出の割り当てがあり、米の代わりに金銭でも可となり、現金収入を図るため製材所に勤めて山で伐木に従事しました。重いチェーンソーを使い切った材木（重さ六十キロ）をかついで製材所まで運ぶ毎日でした。そのため脚が〇脚になり、両脚步行困難になりました。また現金収入のため建築基礎作業もやりました。

食料もアメリカの援助もあって三、四年もすれば何とか食べるくらいはとれるようになりました。農地解放も有り農村も少しは良くなりました。昭和四十一年には和田山町で初めて耕地整理をすることになり、我が東河地区の奥三カ部落より実施することになりました。しかし何分初めての工事で、県営と言っても県の耕地課の職員も、町役場も、工事を請け負った業者も皆初めて、地元の人等も早く実施した所を何度も視察するなど大変でした。

なかでも工事半ばで業者が倒産し、工事は一時ス

トップすることもありません。どうにか不十分ながら
工事は終わり、今までの十枚以上の田が一枚になり、
稲もまずまずのできて、やれやれでした。

まだまだ負け続けているのが山です。戦時中は鉄と
戦い、戦後は木でした。燃料が無いので山から木を切
り出して薪を焚いていました。今の子供たちに見せて
やりたいものです。空襲でたたくさんの家を焼かれ、ま
た長い間の戦争で家までは手が回らない状況でした。

こうして戦中は鉄が重要でしたが戦後は木が建築材
の主体となり、山から木の切り出しは大変な重労働で
した。今はそのおかげで脚痛が残りこれとの戦いで
す。この木材も外材の安いのがたくさん輸入されてい
ます。また山では松食い虫の総攻撃です。松山は少な
くなり、そのせいカマツタケは高値です。山は水を蓄
え空気を浄化してくれますので大事にしたいものです
が、何分今のところ採算が取れないので山仕事は大変
です。

負けた話ばかり申しましたが、世界一番がありま
す。それは長寿です。二十代で多くの戦友を亡くしま

したが、我々は戦友の分も長生きをして、少しでもお
国のために最後のご奉公ができれば幸いです。

昨年妻を亡くし役場勤めの三男と同居しておりま
す。長男は二十五歳で病死、次男は明石で会社勤め、
娘三人は嫁いで、私は孫と嫁の四人暮らしです。嫁は
幼稚園勤務です。

私は現在恩欠連の和田山支部の副支部長を支部発足
以来勤め、及ばずながら頑張っております。

ドンゴロスの兵隊（一）

岡山県 田上 建

昭和十九（一九四四）年八月二十六日十二時過ぎ、
私の乗った所有船「多力丸」が日生の港へ帰って来
た。隣組十一軒のうち五軒の門に当時応召兵士の家の
風景である二本の日の丸が、交差してはためいてい
た。それを見た私は、にぎやかに友達と一緒に入営で
きると心強く思った。